

特集：共生社会における『多様性』を教育の場でいかに保障するか インドネシア・アチェと東北を行き来する「双方向スタディツアー」 —インドネシア人参加者の変容に着目して—

中 川 真規子

(文教大学教育研究所客員研究員)

‘Reciprocal Study Tour’ between Aceh, Indonesia and Tohoku Region:
Attention to Changes of Indonesian Participants

NAKAGAWA MAKIKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

地震・津波の被災地であるインドネシア・アチェと日本・東北地方。NPO法人地球対話ラボでは共通した経験をもつ両地域の人々の交流・学び合いの場として「双方向スタディツアー」に取り組んでいる。日本人がインドネシアを訪問するだけでなくインドネシア人が日本を訪問する双方向の行き来によって、参加者は訪問側／受入側を体験することになる。ツアーに参加したインドネシア人からは様々な自身の変容が語られることとなった。

1. はじめに

グローバル化が進み、国境という「境界」が曖昧になっていくように思える一方で、世界の至る所で、「不寛容」「自国第一主義」「分断」などとも表現される出来事が次々と起きている。

このような世界情勢の中、日本政府は2018年12月、出入国管理法及び難民認定法を「改正」した。事実上の「移民受け入れ政策」とも言われるこの「改正」によって、2019年度は最大約4万8,000人、5年間で最大約35万人の外国人労働者の受け入れが政府によって公表された¹⁾。入管法の「改正」以前から、日本社会には多くの「外国人」が暮らしてきており²⁾、改正以前の様々な取り組みが評価・省察されることは大いに必要なことだろう。

法改正によって、日本社会に生きる人々のバックグラウンドはより急速に多様化し、共生社会へと舵を切る必要性は、もはや避ける

ことのできない現実として私たちの目の前にある。

本論では、筆者が理事として所属する特定非営利活動法人地球対話ラボ³⁾による、「日本とインドネシア・アチェによる被災地間協働事業」で実施されてきた、相互交流活動について取り上げる。被災地間の双方向的な相互交流活動を続ける中で「双方向スタディツアー」は生まれた。事業と双方向スタディツアーについては後ほど詳述する。

本論では、2019年9月にインドネシア・アチェで実施した半構造的インタビューをもとに、インドネシア人参加者の日本訪問時の体験と、インドネシア人参加者による日本人参加者受け入れ時の体験によるインドネシア人参加者の変容に着目する。

なお、本論は「双方向スタディツアー」に関する研究の第一ステップである。そのため、インドネシア人参加者の変容のみを取り上げ

ることとする。今後、日本人参加者へも同様のインタビューを実施し、両地域の参加者の変容を分析・比較していく予定である。

2. スタディツアーをめぐる状況

日本でのスタディツアーは、1980年代初頭から、NGOのスタッフによる現地訪問という形で始まった。その後、団体の会員や支援者、さらには一般の人々へと参加を広げツアーを催行してきた。大手旅行会社の参入や、最近言われる若者の「内向き志向」なども相まって、実施する団体は減少傾向にあると言われている⁴⁾。

スタディツアーの定義は先行研究によっていくつか提示されているが⁵⁾、藤原(2014)は教育学的な立場から

「スタディツアーとは、NGO(国際交流・協力の市民団体)、大学・学校、自治体、宗教団体などが、組織的かつ継続的に、相互理解や体験学習を目的として行うツアーであり、内容的には、観光のみならず、現地事情やNGOによる活動などの学習、現地の団体や人々との双方向的な交流、参加者自らの参加、体験、協力などが可能なプログラムを持ったツアーである。また、事前事後の学習やふりかえり、現地で見聞し、交流し、体験するなかで得る学びの共有やふりかえりなどがなされることによって、自己の実存的な変容とそのプロセスを伴うツアーであり、それによって、他者および他地域への貢献・還元が生じ、グローバル社会の課題と展望、支え合いを生み出していく教育活動である⁶⁾。」

と定義づけている。

近年、スタディツアーの教育的価値やプログラム内容、参加者の変容などの分析・研究が進められている⁷⁾。しかし、スタディツアーの特性上、特に行き来という点で見ると、「先進国」から「途上国」へと一方通行的に

実施されることが多い。したがって、スタディツアーの教育的意義や参加者の変容についてまとめられたものは、必然的にツアーに参加することのできる日本人の視点で語られることになり、逆の視点で語られるものは多くない⁸⁾。

3-1. 「日本とインドネシア・アチェの被災地間協働事業」について

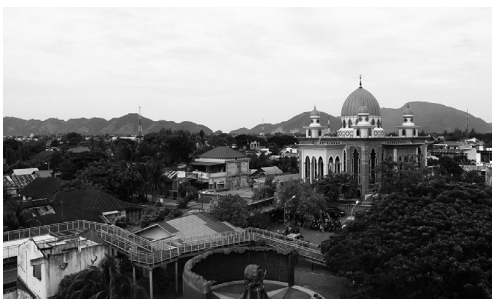
2011年3月11日、国内観測史上最大のM9.0という巨大地震と津波が東北地方を襲った。この震災で死亡・行方不明者はおよそ1万8,000人以上に上っている⁹⁾。震災から8年が経過した東北地方では、東北地方沿岸部を覆うように建設されている防潮堤や土地の嵩上げ工事が現在も続く。ハード・ソフト両面における復興の進み具合は地域によって差が生じている。

2011年から遡ること7年、2004年12月26日、インドネシア・スマトラ島沖でM9.1の巨大地震、遠くアフリカ大陸まで到達するほどの巨大津波が発生した。インドネシアだけで約16万人、インドやスリランカ、タイ、マレーシアなどの周辺諸国を含めると約22万人もの人が死亡・行方不明となったといわれている¹⁰⁾。2019年12月で震災から15年を迎えるアチェは、現在、復興を遂げ経済発展に沸いている。



(図1：インドネシア・アチェの位置を示した地図、地図データ@2018Google,ZENRIN)

「日本とインドネシア・アチェの被災地間協働事業」は、被災の時期は違えど、地震・津波による被災という共通した経験を持つ日本の東北とインドネシアのアチェの人々をむすび、協働することで、震災という「負」の経験を未来に進む原動力とし、両地域にとって共通課題である「震災記憶の伝承」への道筋を共に探っていこうとするプロジェクトである¹¹⁾。



(上：屋根の上の船。震災遺構として保存。
下：アチェの街並み)

3-2. 「双方向スタディツアー」とは

「日本とインドネシア・アチェによる被災地間協働事業」では、アート交流やテレビ電話を用いた対話といった様々な形の交流活動が実施されている。その中の1つに、両地域の人々の直接的な交流・学び合いの場として、相互訪問を原型とした「双方向スタディツアー」構築を目指して活動に取り組んできた。

「双方向スタディツアー」と呼ぶ理由は、交流や体験活動そのものの双方向性を指すだけでなく、日本の東北とインドネシアのアチェを、人々が互いに、文字通り双方向に行き来し合い、直接的な交流を行うことを目指し

ているためである。この仕組みにより、かつて日本でインドネシア人をホストとして受け入れた日本人が、アチェを訪れた時は自分が受け入れたアチェ人にゲストとして迎えらるということが起こり得る。インドネシア人参加者にとっても同様、訪問／受入の両方の立場を体験することがあり得るのである。

2013年から継続している相互訪問の積み重ねが「双方向スタディツアー」の原型となる。これまでに日本からアチェへの渡航10回、アチェから日本への渡航9回、合計19回の相互訪問を行ってきた。加えて、両地域の人々にとって第3の地であるマレーシアへの渡航（日本人とアチェ人の双方が参加）1回も含めると、合計20回を重ねる。

3-3. 双方向スタディツアー概要

本プロジェクトにおける、「双方向スタディツアー」の短・中期的な目標は、「自分自身の目で見て、聞いて、体験し、得たことを被災地間協働プロジェクトの運営や企画立案に生かす」というものだ。詳細は省略するが、この目標はおおむね達成されている。

事業の性格上、訪問・交流先は、被災地、震災遺構、NPOや学校などの教育関連施設・団体、アート関連施設・団体が多い。

内容は、訪問だけでなく、参加者がテーマごとに調査を実施するフィールドワーク的な要素、関連するワークショップへの参加やプレゼンテーションの実施といったインプットとアウトプットの両方を組み込むように配慮している。また、活動のふりかえりと共有を行い、活動を内省し、参加者・スタッフやガイドを交えた対話の場を設けている。(表1)

(表1：「双方向的スタディツアー」日程例)

日数	滞在場所	活動内容
1	東京都	来日
2		アート関連施設や関東大震災関連施設、浅草等訪問
3		2018年度活動報告会参加。活動内容をプレゼンテーションし、ディスカッションに参加、ふりかえり
4	福島県	原発被災地ツアー参加、ふりかえり
5～7	宮城県仙台市	アート関連施設、復興住宅、震災遺構等を訪問、地域の人々との交流活動。ふりかえり
8	宮城県東松島市	博物館、震災資料館等を訪問、ふりかえり
9	宮城県石巻市	震災復興に取り組むNGO等を訪問。意見交換。ふりかえり
10	宮城県	離日

4-1. インドネシア人参加者の変容

一日本に対するイメージ

双方向スタディツアーがインドネシア人参加者に与えたインパクトを、ツアー中に実施したふりかえりや事後インタビューを整理し、「日本」や「日本人」へのイメージの変容、自身の価値観や行動に対する変容という観点から見ていきたい。

インタビューを実施したのはかつて双方向スタディツアーに参加してから1年以上が経過した渡航時期の異なる参加者4名(A, B, C, Dとする)である。どの参加者もこの双方向スタディツアーで訪問/受入の両立場を経験している。Cのみ、ツアーに参加する以前に別プログラムで日本への渡航歴がある。

参加前の「日本」や「日本人」に対するイメージは例えば、閉鎖性や冷たいというイメージを持っている参加者が見られた。

A：日本人と私が親しくなるのは厳しいのではないかと感じていた。それは、日本人がよく知らない人物に対して簡単に心を開かないと思ったからだ。

B：日本人については、以前映画で見たことのある「ヤクザ」のような人々で、周囲に対して配慮しない人々なのではないかというイメージを持っていた。

よくしつけられている、他者に敬意をはらうというイメージも挙げられている。比較的ポジティブなイメージをもつこの参加者は、過去に別のプログラムで訪日している。だが、そのイメージは過去の渡航以前も同様であったと答えている。

C：日本人はとてもしつけが行き届いた人々が多いイメージだった。また、どんな小さなことでも敬意を払う人々なのではないかというポジティブなイメージを持っていた。

「日本」に対しては、技術力や完成された法整備という姿を描いていた。

B：インドネシアを含む多くの国が様々なことを学ぶことができるような発展した国のように思っていた。例えば、技術、清潔さ、文化などに関してだ。

D：日本といえばきれいな国、整った国、法律などがしっかりした国だと思っていた。日本は法律が厳しい国だと思っていたので、法律で禁止されていることをしないよう意識しようと思っていた。

日本訪問が初めての海外という参加者の持つ日本人へのイメージは比較的ネガティブなものが挙げられたが、そのイメージが渡航後

どのように変化したのか見ていきたい。

参加者は、ツアー中、ローカルな日本人との交流に参加した。例えばアチェの紹介プレゼンテーション、料理交流やホームステイなどが挙げられる。実際に時間を共にすることで、彼らの「日本人」へのイメージが大きく変わったことが見て取れる。

A：日本人へのイメージは完全にまちがっていることに気がついた。日本人は、私のように見ず知らずの者にも心を開き、とても友好的で、また私のことをよく気にかけてくれた。他人同士ではなくまるで家族のように感じた。別れの時はいつも涙を流してしまうほどだった。どのように互いを尊敬しあうかということについて私は最も影響を受けたように思う。

B：「ヤクザ」のようなイメージはまちがいで、日本人は親切で尊敬でき、互いを大切にし合う人々なのだということがわかった。また外国人である私を歓迎してくれた。

D：日本ではゴミを分けると厳しく言うけれど、一人一人を監視しているわけではないので、(自分ももっていた厳しいというイメージは) どうだったのか。私がそういう意識をもちすぎたのか、勘違いだったのかと思った。

東日本大震災で被害を受けた人々との交流活動も行い、言葉はわからずとも、被災した人々の話ぶりや行動から、被災した多くの人々が、まだ東日本大震災の悲しみから動けずにいるのだろう、と感じた参加者もいた。

D：笑顔を見るのがとても難しかった。一人一人に問題を抱えていて、ショックや家族問題を抱えている子どもたちが多かったのかもしれない。笑顔になってほしくて努力はしたけど、結果はその子どもたちにしかわからない。でも、そんな子どもたちをみて非常に驚いたことがある。というのは、あんなに小さい生徒

さんたちでも、水泳の記録を伸ばすという活動を誇りに思っていて、1 km泳げたとか。その記録を伸ばそうという努力を見て驚きました。アチェではそういう水泳の時間はない。でも学校にプールがあって、一人ひとりの生徒さんたちが、記録をなんとかのばそうのばそうとしているのを見て、とても感動しました。

B：私の意見では、日本人はまだ東日本大震災の悲しみから動けずにいるのだろうと思う。私は日本語を理解することはできないけれど、彼らの話し方や行動からそのように感じた。

過去に日本を訪問したことのある参加者は、今回の渡航では前回よりもローカルな人々との交流が中心で、より日本人のことを知ることができたと思うと補足をしてから、

C：日本に対するポジティブなイメージは変わらずより具体的になった。例えば他人に対して敬意を表すという部分。日本人は、写真を撮ってもらっただけでも「ありがとう」とお礼を言う。アチェではそのようなことはない。どのような社会的ポジションであろうと、年齢であろうと敬意を表すという部分はとても勉強になった。

ツアー参加後のイメージの変容を見ていくと、参加者がローカルな日本人と直接の交流をし、自分なりに「日本人」というものを解釈していることがわかる。参加前は「日本」という国に対する漠然としたイメージや、誰かもわからない集団としての「日本人」として語られていたことが、あの時あの場所で出会ったあの「日本人」、あの「人」、という具体的な姿を浮かべ、そのイメージの変容を語っているところは非常に興味深い。誰かもわからない漠然とした「日本人」という集団から、〇〇さんを記憶の中に思い浮かべ語る認識の変化、関係性の変化は交流によってもたらされたものである。

4-2. インドネシア人参加者の変容

—自身の価値観や行動—

双方向スタディツアーの参加から1年以上が経過したメンバーは、その後もプロジェクト全体、双方向スタディツアーの受け入れ側を経験しながら、日本や日本人との関りを続けている。そんな彼らは自身の価値観や行動の変容をどのようにとらえているのだろうか。

A：私にとってとても有益でインパクトの大きなものだった。まず、このツアーはインドネシア・日本、両国がよい関係が続けていくことに非常に貢献している。特にインドネシア人にとっての日本人に対する歴史的なイメージを変えることになったと感じる。このツアーに参加したことで、子どもから大人、様々な立場の人々と知り合うことができた。私がこのツアーに参加してからもう2年が経過したが、今でも私はあの時日本で会った人々とコミュニケーションをとっているし、これから途切れることはないと思う。私たちは私たち互いの気持ちを共有し続けるだろう。

「インドネシア人にとっての日本人に対する歴史的なイメージ」とは、第2次世界大戦のことを指している。アチェには、日本軍が初めてアチェに上陸した地を伝える石塔や、日本軍の飛行場（現在は果物畑となっている）、砲撃台などが残されている。日本軍が略奪を行ったことを未だに覚えている人々もいる。特に地方に行くと、日本軍に関するものを日本人のものにしてしまおうとしに来たのでは、と警戒を受けることもあった。

この参加者は第2次世界大戦を経験した世代ではないが日本軍が潜伏していた村の近くに住んでいる。直接日本人と交流したことで友好的な関係の構築に前向きになったことが見受けられる。一方で、私たちが忘れてはいけないことを明確に鋭く示している。戦後70年が経過した今現在であっても、戦争中の日

本による侵略という歴史はインドネシアの人々の心の中に忘れられることなく残っているという事実だ¹²⁾。

B：新しい経験を私に提供してくれた。私は、彼らのシステムティックでアーティスティックなやり方、例えばゴミ収集の方法や特別なイベントの実施の仕方などを学ぶことができた。加えて、私は日本人がどのように時間を管理しているかということも学ぶことができた。これはとても大きなことで、なぜならインドネシアの人々の多くは時間に対する意識というものをあまりもっていないからだ。さらに、私たちが自文化をどのように保っていくかという点に関してアイデアを得た。日本人の工作中的チームワークというものを学ぶことができた。

D：今でも自分やグループの活動に生かされていることがある。それは活動前にブリーフィングをするようになったこと。目的は何か、企画の意図は、具体的に何をするのかを共有したうえで活動するようになった。活動後にはふりかえりや評価を行う。

日本人というのは、自分にもっと余裕をもってほしい。というのは、遊びとカリラックスという面を自分は見たことがない。もっとそういう時間をもってほしいなと思う。

上記2名の参加者は、日本で出会った人々の行動・方法から、彼らの常識や彼らの暮らす社会を比較し、相対化している。注目すべき点は、自分自身にとって新たな価値や行動を取り入れるだけでなく、そこからさらにその新たな発見を自身の日々の中で咀嚼し、日々余裕のない日本人の暮らしを、多様な視点で表していることにある。

C：福島と仙台を訪問できたことはよかった。福島では、津波被災地だけでなく原発事故被災地域も訪問した。私が想像したこともない状況だった。津波によってもたらされる被害はもちろん甚大だが、原子力発電についてはどのように対処するのでしょうか？この地域を訪れて災害の恐ろしさを実感した。

仙台市では、旧荒浜小学校も訪問した。その学校は津波被害にあったにもかかわらず、津波避難ビルとして活躍した。これはアチェにはない考え方だ。学校の第2の使い道としてアチェにとってはとても意味のあることだ。

福島で集団墓地を見た時、津波や原発の影響によって人の立ち入りが禁止された地域を見た。仙台市にある荒浜地区でも海岸エリアに人が入れないということをガイドから聞いた。それはアチェとは非常に異なる状況でとても驚いたことだった。それらを実際に見て学んだという経験は、私にさらに学ぼうという意欲をかきたてるものだった。自分で学費を払わなければいけないとわかっていたが、この体験がきっかけで災害防災に関して学ぼうと思ひ修士課程に入る道を選んだ。

この参加者自身、津波被災者であり、2004年のスマトラ沖地震・津波の震災遺構を活用した被災地ツーリズムの先進地であるアチェでツアーガイドをしている。その関係もあり、津波や防災については高い関心をもっている。

アチェでは津波後、多くの人々がかつて自分が住んでいた村へ、それが津波に流された場所であったとしても、戻って行ったという。海と人の暮らしの間に防潮堤という境界線を引いた日本とは真逆の道を歩んでいる。被災地であるアチェのガイドとして、両地域の違いを比較し、学び合える点を洗い出し、確かなデータ・情報をもってアチェを訪れる人々にアチェや日本の震災のことを伝えていき

いと力強く語る姿は非常に印象的であった。

今回の4名とは別の参加者（F）がツアー中に語ったものを補足的に紹介する。震災伝承に関して非常に重要な指摘をしているためである。Fは4名の参加者同様、日本訪問から1年以上経過し、日本人をアチェで受け入れた経験を持つ。このふりかえりは、海岸に到達した津波と同じ高さで作られた慰霊碑としての役割ももつ観音像を訪れた後のものである。

F：モニュメントは記録であり感情をともしてはいけないと思う。メモリアルは宗教に向かっていけないでほしい。日本のメモリアルは、文化や宗教が混じっていると感じる。

一般的に宗教心はほとんどないと考える日本人が慰霊碑の前に立つと手を合わせる、それを多くの人が当然の行動と考えている。「手を合わせる」というその行動は宗教的な意味を含んでいる。イスラム教徒として生きる彼らは日本人が無意識に身にまとっている宗教性のようなものを感じたのだろう。震災伝承という面だけでなく、宗教や文化といった個人のアイデンティティの根幹に関わる部分をどのように考えるのかという重要な視点を示している。

5. インドネシア人参加者の変容

—アチェで日本人を受け入れた経験から—
最後に、日本を訪問したインドネシア人が、自身がアチェで日本人を受け入れた体験についてインタビューを行った。

B：インドネシアの伝統的な庶民の足である乗り合いバス、ラビラビに乗って日本人をガイドしたことがある。ラビラビは伝統的な乗り物だが、人々から忘れ去られ古臭いもの、整備が必要なものと考えられている。このツアーはアチェの震災遺構を周るだけでなく、ラビラビを蘇らせる取り組みであった。私はこのツアーの一員として関わられたことを非常に誇りに思っている。

ラビラビは、小型トラックの後ろ部分に客席を備え付けた屋根・窓付きの乗り合いバスだ。低価格で利用することができる一方、窓を開けて風を受ける以外に社内温度を調整する手段をもたず、多くのアチェの人々にとって古臭いもの、ラビラビに乗ってみたいと言うものなら笑われるような乗り物である。

近年、アチェではタクシーの配車サービスの充実や自家用車を保有する人の増加に伴って、かつての庶民の足であるラビラビは消えゆく存在である。すでに伝統的なものとされるラビラビを使ってツアーを実施した。アチェからすると「ヨソモノ」である日本人がラビラビに惹かれ価値を見出すのを見て、自身の文化を再発見、再評価したと言える。



(ツアー客を迎える準備をする
スタッフとラビラビ)

以下に記述する2名は、どちらも日本人のシャイな性格を指摘している。

B：日本人をガイドすると、2種類の反応があった。1つはアチェの食べ物、文化や気候などといった彼らにとって新しいことやものに対してオープンに何らかの反応を見せる人たち。それと比較してもう1つは、あまり反応を見せない非常にシャイな人たちだ。この違いには3つの要因があると私は考えた。1つは若いこと。2つ目は彼らの社会・文化的な背景からするとアチェのものが衝撃的に感じたこと。3つ目は言葉の問題だ。その結果として、間接的に彼らはシャイになってしまったのではないだろうか。これは「よくしつけられている」と評判の日本人でさえも、特に若い世代において、社会性を身に着ける必要があるということを示してくれた。この経験から、私自身は英語だけでなく日本語も話せるようになったほうがいいなと感じた。

アチェに対して異なる反応を見せる日本人を比較しなぜシャイなのかということ考えたこの参加者は、自身の日本訪問で変容した日本人像を再解釈している。日本人、特に若者は社交性を身に着けるべきと指摘しつつも、自分は日本語を勉強した方がいいと感じる姿は、異文化へ歩み寄る姿勢を表しているとも言える。

C：日本人はアチェに来てカルチャーショックを受けているように感じる。しかし、そんな日本人でもアチェの文化を受け入れようと調整し、アチェの文化に敬意を払おうとしていると感じた。日本人が、アチェの辛い料理や手を使って食事をする習慣などを実際に試す姿を見るのはとても幸せだ。しかし反対に、日本人の中にはローカルなアチェの人々に挨拶をしたり、新しい出会いに躊躇したりするシャイな人もいる。私は、両者を比較して、相手の文化を受け入れ、敬意を払おうとする人々のようになりたいと

思う。社会的で新しい出会いにどんどん飛び込んでいくような人になりたい。なぜなら、誰かの文化を知るための道は、ただその人と交流をもつこと以外にないのだから。

アチェの文化を受け入れ、適応しようと試みる日本人を見て幸せと感じたこの参加者からは、異なるバックグラウンドをもつ者たちが歩み寄るには、その全てとは言わずとも、互いに試して受け入れようとする「寛容」な態度をどう身に着けていくか、という大きな問いを提起している。

6. おわりに

今回、「双方向スタディツアー」に参加したインドネシア人の語りを詳細に見てきた。人々との交流や体験活動などのプログラムを持つスタディツアーが、インドネシア人参加者へ様々な変容をもたらしたことがわかった。

インドネシア人参加者がもっていた抽象的な「日本」「日本人」へのイメージは、交流・体験によって生まれた顔の見える関係によって具体的になった。また、インドネシア人参加者が自身の生活や文化などを日本のものと比較し、相対化し、問い直す姿も見られた。注目したいのは、異文化に対してシャイな一面をもつ日本人についても語られたことだ。

インドネシア人参加者にとっては、「日本人」を多面的に捉え自身の視点を「ずらす」ことになっただろう。同時に、受け入れられた日本人にとって、この視点は自身の在り方をとらえ直すきっかけとなっていると考えられる。訪問／受入の変容を、インドネシア人と日本人参加者が共有し、互いの理解を深めるだけでなく、互いに固定概念の相対化が起ころうということが、「双方向スタディツアー」で立ち現れた重要な学び・学びのプロセスと考える。

固定概念の相対化と言える変容を生み出した今回の双方向スタディツアーから見えてくるもの、それは、人々が、自身の手で、既存の枠組みに気づき「捉え直す」こと、またその学びのプロセスそのものが、多様なバックグラウンドをもつ人々同士が対話を始める1つの土台になるのではないかということだ。

今後は、インタビューができなかった他のインドネシア人参加者へ聞き取りを行うこと、日本の「双方向スタディツアー」参加者に対しても同様のインタビューを実施しこのツアーが参加者にもたらした変容を双方の視点から明らかにしていきたい。

最後に、本プロジェクトはインドネシア側・日本側ともに、本当に多くの人々や団体の協力・協働があり実現することができた。こうしてつながり、活動ができることに心から感謝したいと思う。

- 1) 朝日新聞デジタル (2018年11月14日付)
<https://www.asahi.com/articles/ASLCG454QLCGUTFK00D.html>
(2019年9月26日閲覧)
- 2) 2018年度末の在留外国人の人数は273万1,093人。
法務省
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html
(2019年9月26日閲覧)
- 3) 特定非営利活動法人 地球対話ラボ
新しいメディアの在り方を目指し、2002年「アフガン対話プロジェクト」から活動を開始。衛星電話とテレビ電話を使って、戦争で荒廃したアフガニスタンの首都カブールと日本の高校生同士の対話を実施。その後も、様々な場所に生きる、様々な人々をつなげる対話活動を行ってきた。活動を通して、「同じ地球に生きる人間なんだ」というような「自分」と

「他者」の関係性への気づきを目指している。

<http://www.taiwa.or.jp/>
(2019年9月26日閲覧)

- 4) スタディツアー研究会編『実践的！スタディツアー学』スタディツアー研究会、2016、pp8～9.
- 5) 市原芳夫『スタディ・ツアーのすすめ』岩波ジュニア新書、2004や、スタディツアー研究会編『実践的！スタディツアー学』スタディツアー研究会、2016など。
- 6) 藤原孝章「特定課題研究プロジェクトについて」『国際理解教育』Vol.20、2014、p.36.
- 7) 例えば、藤原孝章・栗山丈弘「スタディツアーにおけるプログラムづくり―「歩く旅」から「学ぶ旅」への転換―」『国際理解教育』Vol.20、2014、pp42～50や、中山京子・東優也「海外体験学習における学びの変容と市民性」『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、2017、pp60～75など。
- 8) 日本からのスタディツアー参加者の受け入れ側インパクトを研究したものとして、田中博編・著「スタディツアーにおける現地受け入れ側インパクトの考察」2000、がある。
- 9) 平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震の警察措置と被害状況
<https://www.npa.go.jp/news/other/earthquake2011/pdf/higaijokyo.pdf>
(2019年9月26日閲覧)
- 10) 朝日新聞デジタル（2014年12月26日付）
<https://www.asahi.com/articles/ASGDN640NGDNUHBI022.html>
(2019年9月26日閲覧)
- 11) 「日本とインドネシア・アチェによる被災地間協働事業」の詳細は、プロジェクトページをご覧ください。なお、本プロジェクトは、公益財団法人ト

ヨタ財団様、独立行政法人国際交流基金アジア文化センター様、YS市庭コミュニティ財団様の助成を受けて実施するものである。

<http://www.taiwa.or.jp/aceh-japan/2018/ja/index.html>
(2019年9月26日閲覧)

- 12) 同じ第2次世界大戦の記憶でも、日本軍を友好的に捉え「日本軍は友達だ。」と話すアチェ人にも出会ったことは事実として記しておく。

(参考文献)

- ・スタディツアー研究会編『実践的！スタディツアー学』スタディツアー研究会、2016
- ・市原芳夫『スタディ・ツアーのすすめ』岩波ジュニア新書、2004
- ・子島進・藤原孝章編『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、2017
- ・藤原孝章・栗山丈弘「スタディツアーにおけるプログラムづくり―「歩く旅」から「学ぶ旅」への転換―」『国際理解教育』Vol.20、2014
- ・田中博編・著「スタディツアーにおける現地受け入れ側インパクトの考察」2000
- ・乾美紀「海外フィールドスタディと国際理解―タイ・ラオス国境でのフィールド調査を通して考える―」『国際理解教育』Vol.19、2013、pp84-88
- ・高橋優子「スタディツアーの教育的意義と課題―JICAカンボジア事務所での経験に基づいて―」『筑波学院大学紀要』第3集、2008、pp149-158